

ナイトメア・クリスマス ス

葉っぱの妖怪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある組織の構成員である青年ととある最凶の精霊のクリスマススイブのお話
原作の1年前の物語です

目次

ナイトメア・イブ

1

ナイトメア・イブ

今日はクリスマススイブ。しかも、雪が降っているホワイトクリスマスだ。

しんしんと雪が降っている中、俺、星咲ほしざき 狂きやうはシャクシャクと薄く積もった道を踏みしめて帰路についていた。

「はあ・・・」

帰路についてから何度目かわからない溜息をする。そのわけは数時間前にさかのぼる。

いつもと変わらず、いやあえて変えずに仕事をしていた俺は司令に呼びだされた。

なんかやらかしたか？まさか、五河司令を愛でる会で盗撮写真を提供したのがバレたのか？それとも・・・と思いつつ向かうと開口一番

「星咲、もう休みなさい」

と言われた。どんな罵倒をされるのだろうか、楽しげフンゲフン内心びくびくしていた俺は呆気にとられて「ふえ!」と変な声がちやつて、五河司令からご褒美をもらっちゃったくらいだ。ありがとうございます!!

「今日はクリスマススイブでしょ？だからもう仕事終えてクリスマスをすごしなさい。た

だでさえあんたは、ここに配属されてから一回も休暇を取ってないんだから、有給ありまくりなのよ。たまには家族とかに会ったらどう？」

こんな俺を拾ってくれた五河司令の善意を断るわけにもいかず

「わかり、ました・・・」

俺はうなずいた。

これはフラクシナスの構成員家族を自他共に誰よりも知ってる五河司令も知らないことだが、正直な話、俺と家族の仲は最悪だ。休暇を取らなかつたのも家族に会いたくなかつたからだ

理由は俺は以前務めていたA S Tの最強と言われるほどだったが、ある出撃の時にある精霊に衝撃的な出会いをした。そのことがきっかけで精霊を殲滅することに疑問を持つようになり、そのままA S Tを退職。籍はどこかの駐屯地の隊長がやめてつた時と同じ残っているらしいが、A S Tが方針を変えない限り、俺が戻ることはない。俺は正しいと思つて起こした行動だが、この行動により問題が発生した。

俺の両親だ。

通常、A S Tは家族にすら口外を禁ずる職業だ。口外された場合、顕現装置リアライザを応用した記憶消去処理が行われ、厳しく罰せられる。だが、それには例外があり、家族が既に精霊、対精霊部隊の存在を認知している場合、それは行われない。

俺の場合、父親が元魔術師^{ウィザード}で母親が技術士で父親が怪我でやめざるを得なかった時、ついてきたらしい。

俺がASTをやめたと聞いた時、母親はホツとした表情をしていた。一人息子がもう死地に行かなくて済むと思って安心したらしい。だが、父親がそうはいかなかった。父親は妹を精霊に惨殺されていたらしく、戦えなくなつた自分の代わりにその精霊を惨たらしく殺せと怒り心頭だった。完全に居心地が悪くなつたから、逃げるように俺は家を出て、天宮市にきた。

寝る場所もなく途方に暮れていたところに副司令の神無月 恭平に声をかけられ、住居と金、そして精霊のためにラタトスクに入った。

家族にはそれ以来、連絡を取っていない。

「ああ・・・意味もなく、思い出しちまつたな・・・」

肩に軽く積もつた雪を払いながら愚痴る。そういえば、クリスマスらしい食べ物なかったな。俺の脚は自宅から商店街へと向きを変え、歩み続ける。

商店街はクリスマススムード一色だった。ところどころでクリスマス割引とかをやつてる店があつた。

とりあえずジンジャールと肉、あとケーキホールぐらい買っていくか・・・

「○○寒いぃ〜」

「ははっ、一緒にマフラー巻けば問題ないだろう?」

どこで買うか・・・と考えているとある話し声が俺の耳に入ってきた。同じマフラーを二人で巻いてる男女。通称リア充。我々の敵。

そんなことを思ってるなんて露知らず、そのリア充は周りに関係なく桃色空間を展開している。良く見たら、そいつらだけではなく、それ以外にもリア充が蔓延っていた。友人と呼べるのはフラクシナスの同僚だけというぼっちの俺には色々辛いものだった。そそくさと買うもの買って、俺は商店街を後にした。

市街地の一角、一人暮らしするには大きすぎる自宅の門を開け、玄関の扉の鍵穴に鍵を刺し、ガチャリと開錠した。

「ただいま〜」

扉を開け、誰もいないはずの家に声が響く。もちろん、返事はなかった。いや、逆に返ってきたらこええよ。

靴を脱ぎ、リビングのテーブルに荷物を置き、テレビをつける。どこのチャンネルもクリスマス特集だった。よく考えてみればそんなことは容易に想像できたはずなのに・・・。

テレビを消し、二階の自室へと向かう。自室では俺の大雑把な性格か、衣服が散らばって床の半分近くが埋もれている。俺はそのことに気にもせず、下着以外服を脱ぎ捨て、適当な部屋着を着こむ。

携帯の充電がまだ十分にあることを確認すると、階段を降り、リビングへ戻る。

テーブルに置いた袋から肉、ジンジャエールとケーキを取り出し、ポッチパーティの準備をする。

肉を皿にのせ、ジンジャエールを注ぎ、ケーキのロウソクに火を灯す。

「メリークリスマス」

皮肉を込めてつぶやき、グラスに口付ける。

「あらあら、メリークルシミマスではなくって？」

「ぐふお!!?!」

突如として聞いたことのある声が聞こえ、誤って気管にジンジャエールが……痛
い……

「ゲッホゲホ、お前さん、どこだよ……」

「後ろですわ」

返答を聞いた瞬間にテーブルに体をぶつけない様に距離を取る。俺が座っていた座布団の影が蠢き、人の形に変化する。

とりあえず狂三の体を家に入れ、めつちや冷たくなっていたから暖房を最大まで上げ俺がさつきまで着てたジャンパーを着せた。

「ほらよ、ホットミルクだ。飲め」

「ありがとうございます。いただきますわ」

俺からホットミルク入りのコップを両手で受け取り、フーツフーツと息を吹きかけてから飲み始める。

こうみると可愛いもんなんだよな。この目の前にいる美少女が、最凶最悪の精霊、識別名ナイトメアなんて一体誰が信じるんだ。

精霊識別名ナイトメア。

本人は時崎 狂三と名乗っているが、その正体は自らの手で1万人以上の人間を殺害したまさに悪夢な精霊。

身の丈を遥かに超える巨大な時計盤の姿をした時を操る天使『刻々帝』の能力で相手の時間を一時的に止めたり、自身の時間を切り離して分身体を作ったりできる。さつきの影もそれで切り離された分身体だろうね。

「で、本題だが、なにしに来たんじゃ？」

狂三がホットミルクを飲み干すあたりで聞いてみる。

「狂さんに逢いに来ましたの」

オーケエイ！一旦落ち着こう。たしかに狂三は人の時間を奪^奪う精霊だ。だけど、たった一人の時間のためにここまでするのなあ？！

「何か勘違いされてませんか？」

「人の心を読むのはやめえい!!」

勘違い、つて狂三がそれ以外にわざわざ俺に逢いに来るか？

「私はただ純粹に狂さんに逢いに来ましたの。そのためにこんな恰好してきたんじゃありませんか」

えーつとつまり・・・狂三はただ、本当に純粹に俺に逢いにミニスカサンの格好で雪が降っている中、待ってたつとことか!?

「ええ、そうですわ」

だから、心を読むのをやめるとry

「で、なにするんだ？ただこうだべってるだけ、なら外で待つてる必要ないもんな」

「これですわ」

狂三はゴソゴソと白い袋の中から某ケーキ有名店のパッケージの箱といくつかの瓶を取り出して100点満点の笑顔でこう言った

「二人でパーティーしましょう」

どうしてこうなった……

狂三からパーティーしましよと言われ、即答で了承したのが間違いだっただのか……？

「どおおおしたんですかああああ？ 狂さあああん？」

俺の左腕に派頬を紅く染め、服がはだけて色々と危ない状況になつてる狂三が絡みついていて。てかこれは誰がどうみても

「酔っぱらつてるよな……」

「酔おおおつぱらつてまあせんわよおおおお」

うん、確定した。酔っぱらっている。俺も狂三にお酌されて飲んだ時お酒だと気付いた。てか、腕に柔らかい二つのプリンががががががが

それにしてもいくら俺がもうASTじゃないからってこれは油断しすぎじゃないかな？ それだけ危険視されてないと考えるべきかそれだけ俺を信頼していると考えるか。個人的には後者を押したい。約得だけど

「それにしても暑いですわ……脱いじゃいましよ」

「ちよおおおおおおい!!!」

いきなり狂三がすくつと立ちあがったかと思えば服を脱ぎ始めた。急いで狂三の脱ごうとする手を止める。個人的には見たいがそういうのはこういう場では場違いだし……

「色々和不味いから脱ぐのやめろおおおおお」

「あらあらあらあ？なにがまずいのですかあ？教えてくださりませんか？」

「くっ……」

こいつほんとは酔っぱらってないんじゃないかな……

と、酔っ払いだから油断していたが、突然前触れもなく狂三に体を押された。

幸い倒れたところには座布団が置いてあり、頭は大丈夫だったけど肩甲骨あたりが地味に痛い。

その上に服をR-17、9ぐらいまではだけさせた狂三が馬乗りでのしかかってきた。

「狂三、いきなり何しやがるんだ？」

「キヒヒ、わかってるんじゃないやありませんの？」

うんだからあえてこれを言わせてもらおう

「やめて俺に乱暴する気でしょ!? エロ同人みたいに!!」

「キヒヒヒヒ」

狂三が余計にもたれかかってくる。色々と柔らかくていい匂いがしてもう頭がパァーン状態だよこんちくしよー!!

狂三の顔が眼前に広がる。見れば見るほど狂三ってべっぴんさんだな。

「きひ、きひひひ。大丈夫ですわ。すぐに終わりますわ」

そういつて狂三は俺を影へと引きずり込んだ・・・

「なんてのはゆめだった」

そんなことはなかった。狂三が俺の家で俺を押し倒すなんてありえねえな。それにちやんとパジャマに着替えてるからありえねえし。

まあ、とりあえず飯作るか

階段を降り、リビングに入る。するといい匂いがぷくんと漂ってきてエプロンを着た狂三が朝食を作って・・・つて

「ええええええええええ!!!」

「あら、おはようございます。狂さん」

「なんでいるの!？」

あれは夢だったはずだよな……

「なんでって、昨夜あんなに求めてくれましたと言うのに……」

「求めて!?!俺にしたの!?!」

「なにしたって……ナニですわ」

「昨晚の俺ナニやってんのよおとおお」

「あら?寂しいから行かないでくれって泣いて懇願してたじゃありませんの?それと・も、ナニ想像したんですの?」

もうやだこの娘。

「さあ、早く食べないと遅刻しますわよ?」

狂三にせかさされ、朝食が並べられたテーブルに向かい合って座る。

いただきます。

二人の声が重なる。なんだかんだで久しぶりのにぎやかな朝食。ふと気づいたら俺は笑みの表情を浮かべていた

昨日がどうであれ俺は狂三にこの言葉を送ろう

「メリークリスマス!!」